

# 白衣を脱いだドクターに見えた地域

花戸貴司

**私**

は今、滋賀県東近江市にある水源寺という農村部の診療所で医師をしている。朝七時になると、診療所の玄関を開けるのが私の一日の仕事の始まりだ。玄関の前には、六時過ぎから待っている患者さんたちがいる。「子どもが昨日から熱を出した」「おばあちゃんの診察の順番を取りに来た」「孫が会社に行く際に一緒に送ってきてもらった」等等、朝から診療所の待合はにぎやかだ。

待合の声に耳を傾けると、「○○さんが、往診してもらって家で亡くならはった。今日がお通夜らしいわ」との声。そう、昨夜自分が在宅で看取りをした患者さんのことが話題になっている。この地域では、年老いて介護が必要になっても、食事が摂れなくなっても、最期まで家に居たいと希望される人がほとんどである。また、家族や地域の人も、それを当然のことのように受け止めておられる。

診察が始まると、八十歳代のおばあちゃんが娘さんに連れられて入ってきた。おば

あちゃんは「先生、畑に行くことが楽しみやったのに、この前から膝が悪くなって、行けへんようになってしまった」とこぼしている。しかし、それほど困った様子ではない。娘さんに聞くと、家では洗濯物をたたんだり、裁縫など自分の役割がちゃんあるそうだ。診察を終え、私が「おばあちゃん、もし、ご飯が食べられへんようになつたらどうする？」と尋ねると、おばあちゃんは「もしそうだったとしても、先生、このまま家に居たいんやけどええかな？」と。私も「何かあったら連絡してください。往診にも行きますよ」と応える。おばあちゃんは深く頭を下げ、娘さんは後ろで笑いながら「よろしくお願ひします」と言った。今流行りのエンディングノート（人生の最期を迎えるにあたって自分の思いや希望を家族などに伝えるメモ）を書けなくても、家族の前でこちらから尋ねると、皆、自分の最期をどう迎えたいか真剣に、そして思慮深く語ってくれる。すべての人の希望が叶うわけではないが、いざというときに家族が迷うことがないように必要な準備である。

午後からは、訪問診療の時間にあてている。重症の方であっても各々私の訪問は1〜2週間に一回で、それ以外の在宅生活は、訪問看護士さん、ヘルパーさん、行政の方、薬局の方、そして家族の方に支えられている。もちろん緊急時の往診対応もしているが、私の出番はさほど多くない。在宅で生活している方全般にいえることだが、病院にいるよりも家にいるほうが、とても幸せそうにしておられる。

**こ** の水源寺診療所に赴任して、もうすぐ一三年が経とうとしている。それまでは総合病院で小児科を中心とした研修を行ない、病院での生活が中心だった。病院勤務時代は二人体制の小児科で年間三六五日、毎日がオンコール（医師が順番で夜間や休日にも電話が常につながるように待機している勤務体系）という生活を過ごしてきた。その頃は「この小児科は俺に任せろ」との意気込み（おごり？）で、病院



はなと たかし

1970年、滋賀県長浜市生まれ。1995年に自治医科大学を卒業後、湖北総合病院小児科に勤務。2000年に東近江市水源寺診療所に赴任。現在、水源寺診療所長。保健、医療、介護を連携させた地域包括ケアに取り組んでいる。

意見異見

リレーエッセイ ● 63

## 塩田にがりで 食味の向上と 減農薬の実現

おかわりしたくなる  
米作りに!!

- 種子処理—免疫力アップ
- 育苗時—根張り向上
- 田植え後—倒伏防止
- 出穂前後—食味向上  
収量アップ



水口より湧下



塩田製米

## 塩田にがり (生育促進液)



10ℓ入り 6,930円 (税・送料込)

20ℓ入り 12,600円 (税・送料込)

500ml入り 735円 (税・送料込)

塩田にがり 20kg 3,330円(税別・送料別)

宮家糖 20kg 6,855円(税別・送料込)

静岡竹酢液 20ℓ 9,200円(税別・送料込)

【発売元】

有限会社 寺尾農園

【資料請求は下記まで】

〒869-0455

熊本県宇土市椿原町 958

Tel.0964-22-1137

Fax.0964-22-1673

E-mail:terao@topaz.ocn.ne.jp

http://terao-nouen.net/

**診** 療所に赴任してしばらく経った頃、医師官舎の裏庭に、朝、畑でとれたばかりの野菜が置いてあった。患者さんからの届け物らしいが、誰が置いたのかかわらない。見返りを求めない贈りものに、感謝の気持ちが伝わってきた。地域の人の、自分の存在を認めてもらえた、という嬉しさがこみあげてきた。

水源寺に来ていろんなことを地域の皆さんに教えてもらった。地域のつながりや互いをおもいやる気持ち、そして何より自分自身が地域の人たちに支えられていると感じる。自分がこの地域でできることは何かと考えた時、医療を行なうということだけではない、医療を通じた「まちづくり」ではないかと思う。せっかくその地域に住むなら、自分にできることをその地域に還元したい、地域の人たちの笑顔をもっと見たいと思う。結果として、障がいを持った人も認知症の高齢者も子どもも、皆が互いにおもいやり、支えあい安心して生活できる地域になればと思う。

大病院ではできないことでも、地域ならできると信じている。

な元気を増やすための視点が生まれた。

しかし、診療所に赴任して時間の流れが変わった。子どもだけでなく、お年寄りを診る機会も増えた。病院勤務時代には少なかった病気の話をすることが多くなった。話を聞いてもらえるだけで、満足して帰っていくお年寄りたちの後ろ姿を見ながら当初は戸惑っていた。「この人たちは、何のために診療所に来ているのか? 治療するために来ているのではないのか?」と。今から考えると自分が診療所で何をすればいいのか、わかっていなかったと思う。

しかしある時、「地域医療は診療所だけではない」ということに気づいた。診療所の看護師とともに健康教室を開いたり、小学校や幼稚園で講演会もした。お年寄りの会合にも出席した。地域の祭などにも参加した。病院勤務時代にはない経験であった。診療室で座っているよりもたくさんの方が見え、たくさんの方が耳に入ってきた。診療室では決して見せない患者さんの姿がそこにあった。診療所では患者さんだが、診療所を一步外に出ると、その人は患者さんではなく、一人の人間なのだ。医師も然りである。診療所勤務を始めて、ようやく地域が見えてきた瞬間であった。

そして自分の医療におけるスタンスも変わってきた。それまでは「ごはんが食べられないから点滴を」老衰が原因にもかかわらず、「足がむくむので薬を」と考えていた。しかし、同じ地域で暮らす患者さんやその家族とかかわるなかで「病気がかりに目を向けるのではなく、病気と反対側にある元気の部分を増やすことはできないか」と思うようになった。患者さんの患部だけを診るのではなく、その人らしい生活を支え、元気を増やすことで相対的に病気の部分が小さくなるのではないかと。住み慣れた地域で過ごせるよう、家族と一緒に暮らせるよう、畑仕事に出られるよう、そん

意見  
異見

※高齢化した農村で在宅医療を続ける花戸医師の活動を写真した写真絵本「白衣をぬいだドクター花戸(みとりびと・第四巻)」(農文協刊)もご覧ください。